

研究課題: 歯科医院での口腔機能を高める歯科保健指導の虚弱・介護予防に対する効果の検討

研究者名: 比嘉良喬<sup>1)</sup>、米須敦子<sup>1)</sup>、小禄克子<sup>1)</sup>、仲程尚子<sup>2)</sup>、武井典子<sup>3)</sup>、石井孝典<sup>3)</sup>

高田康二<sup>3)</sup>

所属 : <sup>1)</sup>一般社団法人沖縄県歯科医師会、<sup>2)</sup>沖縄県歯科衛生士会、

<sup>3)</sup>公益財団法人ライオン歯科衛生研究所

申請者らは、高齢者が口腔機能の低下を自覚⇒低下した機能を高めるプログラムを実践⇒数カ月後にその効果を体験できるシステムを開発し、介護予防や認知症の予防に貢献できることを確認してきた。そこで今回、歯科医院に来院する高齢患者に対して口腔機能を高める歯科保健指導を積極的に行い、虚弱(フレイル)・介護予防に貢献できるか否かを検討する第一歩として、歯科医院の高齢患者の実態調査を行った。

対象者は、沖縄県内の歯科医院 15 件に通院した 65 歳以上の介護保険を受けていない高齢患者 131 名(男性 46 名、女性 85 名、75.6±5.6 歳)である。さらに口腔機能を高める歯科保健指導実施 3 か月後の効果を確認できた 54 名(男性 24 名、女性 30 名、74.8±5.7 歳)である。

最初に、歯科医師や歯科衛生士が集まる研修会等を利用して説明会を行った。その後、各々の歯科医院にて、口腔機能を高める歯科保健指導を行った。2016 年 2 月に沖縄県歯科医師会にて歯科保健指導の調査結果を回収して評価を行った。調査および検査項目は、フレイルに関する調査、口腔機能に関する意識調査、歯科衛生士による口腔機能検査である。

その結果、1) フレイルの調査の Cardiovascular Health Study では、フレイルの疑いのある患者は 10%弱、指輪っかテストでは、20~30%に認められ、フレイルの疑いのある患者が来院している可能性が示唆された。2) 口腔機能に関する患者の意識調査の結果では、「口の周り」は 10%前後に、「かむ力」は 20~30%、「飲み込む力」は 20~70%、「口の清潔度(口臭が気になる)」は 30%弱に問題を感じていた。3) 歯科衛生士が口腔機能検査を行った項目では、患者調査とほぼ同じ割合で口腔機能の低下が確認された。4) 週 1 回以上、口腔機能向上プログラムを実施した高齢者は男性 8 名(38.1%)、女性 15 名(60%)であり、口腔機能向上プログラムの習慣化が課題となった。5) 患者の意識調査および歯科衛生士が口腔機能検査を行った項目の両方に改善が確認できたが、歯科衛生士が行った客観的な検査項目において改善を確認しやすかった。6) 口腔機能向上プログラムを約 3 ヶ月実施後の患者の意識した改善項目は、「食事が美味しくなった」、「話しやすくなった」等、多岐に渡っており、本項目を患者が実感することにより、家庭での口腔機能向上プログラムの継続に結び付くと考えられた。

以上の結果から、歯科医院に来院する高齢者はフレイルの疑いのある患者、口腔機能が低下している患者が存在することが明らかとなった。また、本プログラムによる介入により口腔機能が高まることが確認できたことから、今後、歯科保健指導を見直し、さらに人数を増やし、長期間の介入効果についてフレイルや介護予防、患者の QOL の両側面から検討していく予定である。